

**立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金  
企画研究プロジェクトⅡ（教員・学生参加型） 2016年度研究成果報告書**

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	コミュニティ政策学科 3年	津田 萌香 印
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部 助教	熊上 崇 印
研究課題	福島県双葉町との交流を通じて原発事故からの復興支援を考える	
研究年度	2016年度	
プロジェクト 分担者	津田萌香 平山拓哉 塚本和弥 三川竜汰 山口桂輔 山口真奈 青木莉里 高橋蓉子 鶴田真菜	

**プロジェクトの内容及び成果の概要**

研究の目的・方法

私たちは、福島第一原子力発電所の事故によって放出した放射能により避難を余儀なくされた、福島県双葉町のコミュニティについての研究をした。

双葉町では震災直後に約1200人が役場の機能ごと埼玉県加須市にある廃校に移転し、現在でも多くの被災された方が加須市で生活をされている。今年で震災から6年が経つが双葉町の放射線量は高く、復旧及び帰還の目処は未だに立っていない。私たちはドキュメント映画『フタバから遠く離れて』や同名の書籍をもとに学びを深めた。

双葉町社会福祉協議会加須事務所への訪問・交流

昨年5月から6回（5月16日、6月20日、7月4日、10月24日、11月21日、12月19日）、双葉町の町民が多く住んでいる加須市にある「双葉町社会福祉協議会加須事務所」を訪れた。そこで震災当時の状況や避難生活の様子などを伺ったり一緒にレクをしたりすることで、双葉町の方々との交流を図りながら学んだ。そこで学んだのは、双葉町の方々は今对生活に対して前向きであるということだ。中にはもちろん、双葉を懐かしみ帰りたいと話される方もいる。しかしそれは、何十年先の話だろうかと彼らは嘆いていた。双葉町の方々に感じられるその前向きさは、「おそらく、生きていくうちには帰れない」と感じつつも、皆で集まり、元気になれるという思いから作られているのかもしれない。また、社協は集まりに来られない住民もサポートし、“双葉町民のコミュニティづくり”を実現させている。

考察及び成果

私たちは“東日本大震災のもたらしたコミュニティの在り方”について考える機会を得た。その時大切なのは、「これからは被災者が生きがいや希望や仲間意識を感じられるようなコミュニティをつくる支援が必要であること」だ。避難生活が長く続く今、被災者が必要としているのは賠償金だけではなく、新しい雇用やコミュニティである。

つまり復興とは、震災によって失われた家や土地だけを回復するのではなく、やりがいや生きがいといった精神的なものを満たすことによって、初めてそう言えると考えた。

そして、そのことを踏まえ、私たち学生にできることは「現状を知り、伝え、風化させないこと」である。震災から6年経った今だからこそ、もう一度思い出してほしい、忘れないでほしい、と私たち学生は考える。